

支部報告

関東支部 2025 年度シンポジウム「江戸の色を素敵に探る」

Report on the Kanto Branch 2025 Symposium : "A Reflective Exploration of the Colors of Edo"

日高 杏子
Kyoko Hidaka支部幹事・女子美術大学
Branch Committee Member,
Joshi University of Art and Design

NHK 大河ドラマ『べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～』の人氣もあり、江戸時代の文化があらためて見直されている。「粋 (いき)」「野暮 (やぼ)」などの江戸固有の美意識が育まれた時代。こうした流れを受け、日本色彩学会関東支部は、2025 年 4 月 12 日に「江戸の色を素敵に探る」と題したシンポジウムを開催した。東京家政学院大学を対面会場に、ハイブリッド同時配信形式で実施された。橋本実千代氏、大和あすか氏、河上繁樹氏をゲストに迎え、多角的視点から江戸の色彩の研究成果を伺った。

1. 橋本実千代氏 (株)日本教育クリエイト) 「江戸文化と色名」

江戸時代を初期・中期・後期と俯瞰して、流行した色や背景についてそれぞれ比較、概説した。具体的には、藍染における明度と色相の多様化、茶や鼠といった色の流行、さらには役者や茶人から派生した役者色についても紹介された。さらに橋本氏は、色彩文化に関する関連図書や、河上氏の著書などを会場内の閲覧用に持参し、参加者が休憩時間に実際にページをめくる姿も見られた。

2. 大和あすか氏 (国文学研究資料館 特任助教) 「錦絵に用いられた色材とその変遷について」

文化財科学を専門とする大和氏は、博士学位論文を基に、江戸時代の版画などに用いられた色材の変遷について解説した。色材が変化した背景には、顔料の輸入、流通の変化や人工色材の開発・普及といった要因が密接に関係していることが、研究によって裏付けられた。また、近年の色材研究の一例として、江戸と上方における版画に使用された色材の比較も紹介された。特に、ベロ藍 (プルシアンブルー) の導入時期の違いや、コチニール、天然・人工黄色の普及状況などについて、具体的事例と各色相の測色データを挙げて論説した。

3. 河上繁樹氏 (大阪学院大学 教授) 「『いき』な小袖 -京風から江戸風へ-」

学芸員として染織品の実物を取り扱った経験を持

ち、文化論に関する著書を出版した河上氏は、京風の「はんなり」(花なり、すなわち華やかさ)から、江戸の武家や男性中心の社会に根差した価値観への変容について知見を共有した。友禅模様においては、かつて大柄であった意匠が、光琳模様の流行に伴って次第に小ぶりとなり、縞やくすんだ色へ移りかわった。さらに、一見地味だが裏地に趣向をこらす「底いたり」など、小袖の具体的事例を交え、独特な江戸時代の美意識の確立をわかりやすく例示した。



上図：総合討論／下図：会場風景



4. 総合討論／質疑応答

総合討論では、関東支部幹事である名取和幸氏 (日本色彩研究所) が司会を務め、会場から寄せられた橋本氏、大和氏、河上氏への質疑やコメントを受けながら進めた。色名の数、染料や顔料の調査、原料価格、技術の問題、さらには復元された色の正確さについて、各氏が自身の考えを共有した。図像解釈が中心の美術史に比べ、工芸史や保存科学の分野では、技法や材料に関する検討が重視されてきた。江戸時代に限らず、色彩文化を深く探るために、日本色彩学会はこのような学際的議論の場を、より積極的に提供していければ幸いである。